ことぶき「なか」だより
No.144
2011.4.

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 305
Tel.（045）671-1109
振替　00200 － 1 － 47369
E-Mail : naka@church.jp　http://church.jp/naka/
発行者　渡辺英俊　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

# 今「フクシマ」で起こっていること

## 緊急特集！

担当　小笠原敦輔　小笠原公子　渡辺英俊

大地震、大津波に加えて原発事故と、三重の災害に苦しむ方々に、心からのお見舞いを申し上げます。また、亡くなられた方々を謹んで哀悼申し上げます。

特に原発事故は、自然災害ではなく、スリーマイルーチェルノブイリを越える「フクシマ」になりつつあり、かねてから恐れ、警告していた事態が現実となってしまったもので、無念でなりません。被災状況への理解を深め、少しでも苦しみを共有したく、緊急に特集を組みました。

### 事故のあらまし

すでに報道されていることに沿ってですが、事故のあらましをたどってみましょう。

福島第一原発は、福島県の沿岸部、大熊町、双葉町にまたがって立地しています。沸騰水型軽水炉が六基、一九七一年から七九年にかけて運転を開始しました。これまでに報告された大きなトラブルは五件、蒸気洩れ等の小規模事故は頻発しています。二〇一三～一四年稼働予定の七、八号機も計画されています。九キロ南の海岸線には福島第二原子力発電所（沸騰水型軽水炉４基）があり、首都圏向けに電気を作っているこの地域は原発銀座とも呼ばれています。

三月一一日に発生した東日本大震災とその後の大津波で、外部からの電源と非常用ディーゼル発電機を失い、原子炉や使用済み核燃料貯蔵プールの冷却水を循環させる機能と、非常用炉心冷却装置の機能を完全に喪失しました。稼動していた一・二・三号機は地震発生時に緊急停止しましたが、崩壊熱による高温を保ったままだった原子炉の圧力容器内の燃料棒の損傷が進むと、大量の放射性物質を大気中に放出させることになるため、これを防ぐ目的で海水の注入が行われました。この過程で、一号機と三号機では、格納容器内の圧力を抜く時に排出された水素が、建屋内で爆発し建屋を吹き飛ばしました。

また三号機では、使用済み核燃料貯蔵プールの冷却水循環機能も失ったため、ポンプ車やヘリによる放水が行われました。四・五・六号機は定期点検で停止中でしたが、三号機同様、使用済み核燃料貯蔵プールの冷却ポンプが動かなくなりました。五・六号機は外部電源が回復して小康を得ていますが、四号機はなお外からの注水で使用済み核燃料が壊れるのを食い止めています。

これらの過程で放射性物質が大気中、海水中に漏洩し続け、関東各都県で環境放射能の増加が観測されています。

三月二六日の時点でまだ、事態の全体像の解明も見通しも立っていません。

### 責任の所在

この事故については、一義的には今回のような大地震、大津波を想定できずに原発を設計し、運転してきた電力会社と、国策としてそれを容認し推進してきた政府の責任は免れようがないと思います。一号機が稼働して四〇年になります。当初二五年と言われてきた原子炉の寿命に対し、そのつど発生する不具合に絆創膏を貼るような

手当てをし、無理矢理運転を引き延ばしてきました。三号機は核燃料サイクル推進という国の方針に乗る形で昨年一〇月からプルサーマル発電を開始していました。炉の中には、ウラン燃料と比べると不安定で更に危険な、プルトニウム入りのＭＯＸ燃料が入っています。

現地で事故に立ち向かっている方々には、自分の身をしっかり守りつつ、環境に放出される放射性物質の量を何とか抑えていただきたいと思います。チェルノブイリ原発事故の時は、風向きと雨でホットスポットという汚染地域がいくつもでき、乳幼児、妊婦、お年寄りという弱い立場の人たちから先に被害を受けました。東京、横浜へ電気を送るために、福島の方々が犠牲になり、今甚大な被害を受けていることに胸が痛みます。

## 訴える声

福島県の市民グループは「ハイロアクション福島原発四〇年」（三・二六緊急声明）として、県内一〇基の原発の停止を求め、以下のように呼びかけています。

「全国のみなさん、私たちの故郷福島に起きている現実を、どうぞ注視し続けてください。放射能に県境も国境もありません。私たちと未来の世代の健康と生命を第一に考えた選択をするために、正しい情報の公開と、必要な国・自治体の対策を求める声をあげてください。

核が引き起こす現実、この悲劇を引き起こした私たち社会の現実に、全ての人々が直面することからしか、未来への希望は生まれません。

震災・津波の被害を受けた東北各地の人々、そして放射能被爆の危険を共有する全国民、全世界の人々とともに、この厳しい現実から逃げることなく、被害を最小限にとどめ、今後同様の過ちを犯すことのないよう、人類の勇気と叡智を結集することを呼びかけます。」

「ふるさと」を心の奥に秘めて、寿町やその他の地でくらしている人々の思いと共に、わたしたちはこの呼びかけを受け止めたいと思います。

また、天皇制の問題を問う市民グループが出した声明は、次のように書いています。

「いま、危険極まりない現地で命を削りながら作業に従事する人びとがいる。だが、この命を削る労働は事故時に限らず必要とされてきた。原発とは、死に向かう者の存在なくしては動かない、いわば見捨てられる命が想定内のおぞましいシステムなのだ。

原発現場の日常に伴うその危険度は、この事故という非日常のなかで究極に達している。外部から現地に入る自衛官や警察官、消防隊員は英雄視され、可視化された死に向かう人びとへの感謝と賛美にはかつての特攻隊と靖国神社が彷彿され、言葉を失う。一方で、日常の延長にあったこの事故現場で、文字通り死と直面した命、見捨てられようとする命は、放射性物質の危険性と同様に隠され続けている。」

（反天皇制問題連絡会三月二六日声明より）

たしかに、原発は人間の犠牲の上に成立しているのです。

## 三〇キロ圏内の人々

三月二五日、「屋内待避」指示の出ていた三〇キロ圏内の住民に「自主避難」の勧めが出されました。地域のつながりを守り、政府や「専門家」の「安全」宣言を信じ、留まっていた人々の、政府に裏切られた悲憤の声…。他国政府が八〇キロ圏外への避難を指示していた状況で、なぜ早く、せめて乳幼児、妊娠中の女性、災害弱者への早急な避難勧告が出せなかったのか……。

三月一九日の朝日新聞「オピニオン」欄に、『中陰の花』で芥川賞を受賞した福島県三春町の禅寺住職、玄侑宗久さんの声が掲載されていました。タイトルは「本当にとどまっていいのか」。郡山の病院に長期入院中のお父様を、「原発事故の際どうするか」と、病院から相談されたとか。（その「お父様」は、筆者の一人、小笠原公子が、昔、三春の高校で古典を教わった「お坊さん先生」でした。）

滝桜と「三春駒」で有名な三春町は、福島第一原発から約四五キロ。津波被災者や、原発二〇キロ圏内からの避難民を受け入れてきた町の住民として、宗久さんは戸惑いを隠しません。

「原発から三〇キロ圏外ならば、このままとどまっていても安全だという根拠は何なのか。いつまでとどまっていていいというのか。…（中略）…原発近くにいる我々は、この国の指示を本当に信じていいのかどうかという自問の渦中にある。」

政府がもっとも優先すべきは、日本列島に住むすべての住民の安全確保です。パニックを防ぐという意図があるとしても、事実のほんの一部を知らせるのではなく、きちんと真実を住民に伝え、方向性がわかるようにしなければ、御用学者を登場させて「大本営発表」を垂れ流しても、もはや人々に信頼される政府になることはできません。人々の地域コミュニティが分断されないで、お互い声を掛け合って避難できるように、そして、安心して落ち着ける受け入れ先を、一刻も早く、安全な場所に確保してほしいと思います。

放射性物質の拡散により、福島県の野菜や牛乳だけでなく、首都圏でも、水道水の放射能レベルの基準地以上の検出が続いています。地震と津波で被災した福島の人々の孤立が深まり、救援物資もとどけられないという事態さえ出ています。そして売ることができなくなった野菜、牛乳……。一面深緑の、みごとなほうれん草畑に立ち尽くした福島県の男性は、「二年も三年もかけて作ったのを、全部、トラクターでつぶすなんて！」と、声を詰まらせました。

「何も悪いことをしてきたわけでねぇのに……」。

（まとめ・文責　渡辺英俊）

使信

# 神への問い、神からの問い

渡辺英俊

それは確かにわたしも知っている。
神より正しいと主張できる人間があろうか。
神と論争することを望んだとしても
千に一つの答えも得られないだろう。
……
神は山をも移される。
怒りによって山を覆されるのだと誰が知ろう。
神は大地をその立つところで揺り動かし
地の柱はゆらぐ。
神が禁じられれば太陽は昇らず
星もまた封じ込められる。
……
神が奪うのに誰が取り返せよう。
「何をするのだ」と誰が言いえよう。
……

（ヨブ記九章一―一三節）

神よ、なぜ……

今、東日本大震災を受けて起こっている事態について、ラテンアメリカ・キリスト教ネットのメンバーが、次のような祈りを書いてメールで送ってくれたんですよ。

エリ、エリ、レマ、サバクタニ

なぜ、東北地方太平洋沖で、あんな大きな地震が起こったのですか？

なぜ、あんなとんでもない津波が、何度も陸地を襲わなければならなかったのですか？

エリ、エリ、レマ、サバクタニ

なぜ、原子力発電所が、どんどん危険な状態になっていくのですか？

それに関わる人々の決死の努力が報われたように見えても、危機的な状況であることに変わりはありません。

エリ、エリ、レマ、サバクタニ

なぜ、福島と茨城の農家の方たちが丹精込めて作った農作物が、放射能に汚染されなければならなかったのですか？

エリ、エリ、レマ、サバクタニ

地震や津波の中を生き延びた人が、

避難した先で寒さや医療の不足、ストレスのために命を落とさなければならなかったのですか？

エリ、エリ、レマ、サバクタニ

なぜ、こういう大災害が起こったとき、

高齢者、子どもたち、しょうがいとともに生きている人びと、

大会社の社員ではなく下請け会社の社員、

大都会ではなく田舎や貧しい地域の人びとがよりひどく、痛めつけられなければならないのですか？

エリ、エリ、レマ、サバクタニ

これらの悲惨なできごとが降りかかったのが、なぜわたしではなかったのですか？

主よ、教えてください　なぜですか？

主よ、答えてください

どうすればいいのですか？

主よ、示してください

これから、どのように生きていけばよいのかを。

（中尾貢三子）

## えーとねぇ

（地震の後の原発事故のニュースを見ながら、兄妹の会話）

**とみ・ゆは「なんで危ないのに原子力発電所作るんだろうね～？」**

（テレビで日本全国の原発の場所のフリップを見て）

**とみ「わー、いっぱいある……。」**

**ゆは「日本は全部囲まれてるよ～。こいつは想定外だ～。」**

（子どもの会話に耳の痛い「おかーちゃん」でした）

石倉遊葉一〇歳、遠藤友実八歳

確かにこれは、十字架の上でイエスが「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

（わが神、わが神、なぜ、わたしをお見捨てになったのですか）

と叫んだのと同じように不条理な事態ではないでしょうか。「神よ、なぜ」と神に問わざるを得ないんですよね。

### 神の沈黙

しかし、この「なぜ？」という問いには、答えがないんですね。ヨブは、このような不条理に直面して神に抗弁しても、「千に一つも答えは得られない」ことを承知しているんですけど。でも彼はここで、そのことに抗議しているんですね。

今度の災害について「天罰だ」と口を滑らした知事がいましたね。高みから見下して、災害に意味を与えようなどと考える「驕り」が、そういうことを言わせるんだと思うんですけど。ヨブはここで、そういう類いの「オーソドクシー（正統）」、つまり、人の苦しみを上から見下して説明しようとする驕りに対して抗議しているんですね。彼の時代にも、公認の正統的な教えで何でも説明してしまおうとする人たちがいて、ヨブの苦しみは「自分の罪」のせい、つまり自己責任だから、自分が悔い改めろと責めたてた……。それに抗弁しているのが、冒頭の言葉なんですね。

「神の全能」は重々承知だ。神に抗弁しても無駄なのは百も承知だ。あなたがた正統派の神はいつも正しくて、たとえ奪われても、「何をする！」なんて抗議もできないし、取り返すことなんか思いもよらない。絶対君主みたいに権力を持っているのが、あなたがたの神じゃないか……。そう言いつつ、ヨブは、正統派の言うような、常に正しく、常に絶対者である「カミ」に抗議しているんですよ。「理不尽だ！」とね。

今、私は、同じ思いで、七十八年生きて一度も出会ったことのない、この大災害の現実を見せられている……。「神よ、なぜ……」と、答えのないのを承知で問わざるを得ない思いでいるんですね。

いつの時代にもある正統派のように、災害の一つ一つを「神の意志（みこころ）」のせいにしてしまうのは誤りでしょうね。確かに、そういう不安定さを持つ世界を造り、そこに人間世界を造って下さったのは神ですから、神に問うことは許されていると思うんですよ。でも、一つ一つの災害を神が望んだなんて考えることはできない。わたしたちにできることは、答えを出すことじゃなくて、問い続けることでしかないんじゃないか……。そうして、その重い沈黙の向こうから聞こえてくるのは、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」という、十字架上のイエスの叫び……。神ご自身が、被造物と共にうめき、人間の痛みを共に痛んでいてくださるということなんじゃないか……。そして、わたしたちが被災した人たちの痛みを、どのように自分の事柄として受け止め、痛みを分かちあうか……ということなんじゃないかと思うんですよ。

## 原発災害

それとまったく反対に、神が呆然として「なぜこうなるの！」と問うておられるに違いないのは、原発事故だと思うんですよ。何万人もの被災者を造り、東日本全体を放射能汚染の危険にさらし、消防士や自衛隊員や下請け社員に決死の作業を強いているこの事故は、けっして自然災害なんかじゃない。人災そのものですね。

直接の責任は、いくつものプレートがせめぎ合う、地盤不安定な日本列島の上に、五四基もの原発を建て並べてきた原子力政策。そこから莫大な利益を受けてきた電力資本などの資本家たち。原発の危険を指摘する良心的な研究者を冷遇し、「想定外」を造って安全神話をまき散らしてきた人たちが「権威者」になっている原子力学界……。

しかし、間接的とはいえ、原発の危険を知らせる人たちの声を聞き流し、電力浪費をふつうのこととして生活を営んできたわたしたちも、神の「なぜ？」に直面しなければならないでしょうね。

今はともかく、被害を最小限度に食い止める努力を支援していくこと。被災者たちの生活と健康に最大の援助を惜しまないこと。その努力の中から、次の時代の軸になる、助け合う社会の仕組みと、慎ましい文明のありようを作り上げていくこと。そして、何よりも神の助けを祈り求めること。それが、わたしたちに今できる、せいいっぱいの答えだと思うんですよ。

＊　＊　＊　＊

支援献金（一月分）

支援献金（二月分）

クリスマス献金（1/1～2/28）

感謝してご報告いたします。

## まど

▽二月一一日、大阪教区の二・一一集会に招かれて講演を担当。講演題は「磯子からなかへ――身を置く位置を問い続けて」。牧師になって五〇年を迎え、その総括にも。▽二月一六日、田中牧子さん（前なか伝道所担任教師）の葬儀。二月二〇日、JOCS（日本海外医療協力会）の研修で一六人が礼拝から参加して下さり、クリスマスに次ぐ満杯の礼拝。午後から寿の概況説明。二月二六日、教区総会で、対話路線を大事にする執行部選出。いくらか風通しがよくなるか。三月二日、日帰りで掛川訪問。妹と福祉活動の仲間たちに招かれて、昼食を共にしながら懇談。三月三日、義弟の訃報。六～七日甲府での葬儀に夫婦で詰め。三月九日、農村伝道神学校の卒業式で礼拝説教を担当。▽そして……。三月一一日、横浜でも震度五強を記録した大震災。三月一六日、妻の心づくし（？）の赤飯パックで七八才の誕生日を祝い。三月一九日、なか伝メンバーの結婚式を司式。何が起ころうと、人は生き、愛し、生活を築いていくことの証し。三月二二日、カラバオの会が月末までの予定で、外国籍住民向けの電話相談開設、中華街で案内ビラ配り。▽被災の方々に主の顧みを。

○ベランダに菫咲きたりかくのごと陽よやさしかれ被災の土に（渡辺英俊）